教科書では学べない、オーストラリアのリアル

藍住中学校　　吉本　夕葵

一年生の時、英語の授業でオーストラリア研修の話を聞き、私は、猛烈に憧れ、応募することを決意した。オーストラリアの大自然、現地での学校生活、そして何よりホストファミリーとの日常を思いっきり楽しみたいと思い、出発した。

シドニー到着後はオペラハウスなどを観光し、いよいよホストファミリーとの対面。笑顔で名前を呼んでくれた時は、やっぱりほっとした。

翌日からはバディと共に授業を受けた。日本と同じように数学・歴史・保健体育もあり、生徒たちは積極的に手を挙げて発表していた。楽しかったのは、モーニングティータイムやランチタイムなどの休み時間だった。「ユウキ」とたくさんの人が呼んでくれ、誘いに来てくれた。ホストマザー（リア）が作ってくれたお弁当を食べながら、会話やバレーを楽しんだ。文法は正確なのか、単語も合っているのか不安だったけれど、一生懸命耳を傾けてくれ、伝わった時の喜びは隠せないほど嬉しかった。ブックウィークでは、ホストが準備してくれた衣装を着て参加した。

父（ミッチェル）とリアの気持ちが本当にありがたかった。印象的だったのは放課後の長さ。ホスト先の兄妹（アンソニー、ナオミ）と帰宅し、ファミリーでショッピングモールや教会にも行った。外食もしたが、リアが作ってくれた本場のミートパイは最高だった。夜はゲームや折り紙、ダンスを一

緒に楽しんだ。ふとしたリアクションやマナーを生活の中から感じ取れ、「これが出発前に目標の一つだった異文化交流だ！」と実感し、私も真似をしてテンションが上がった。

ファミリーで過ごした二日間の休日は祖父母の家。アボカビーチへ連れて行ってくれた。アンソニーやナオミと同じように、ハグとキスで迎えてくれ、一緒にガラスのお皿を作ったり、おやつにスコーンを焼いてくれた。「日本でも作ってね。」とレシピもくれたので、淋しくなって、このままオーストラリアに残ろうかなと本気で考えた。

アボカビーチは坂道がものすごく長く、展望台に着いた時は思わず「イエイ！」と叫んだ。初めて日本を出て見た海外の大自然は、こんなに広いんだと感動した。

楽しい時間を過ごし仲良くなれた分、別れる時は悲しくて仕方がなかった。「連絡をずっと取り合おう。また絶対に会おう。」と約束した。アボカビーチの写真集に書き込んでくれた手紙や、滞在中の写真をアルバムにしてプレゼントしてくれ、たくさんの思い出が増えた。

今回、国際感覚の基本を経験する機会を与えていただき、私は藍住町民でよかったなと思った。慣れない環境で考え、行動することで、前向きに取り組む勇気を得ることができた。異文化を理解する心を活かし、将来はより多くの人々と関わり、自分の世界を広げていけるようになりたい。たくさん英語を勉強して、みんなに会いに行き、感謝を伝えたい。